龜谷行編

脩身兒訓

二

084,3
I
2

國民精神文化研究所圖書之印

修身兒訓卷之二

龜谷行

宣理文庫

第一章　倫常

○人の實學たる。五倫上より做し起もことを要し。傳家寶

○凡そ天地父母主君聖人此恩へ。相並びて重し。此四恩を忘れ背く

國民精神文化研究所
39670
漢書

を人にあらば。大和俗訓

○君に仕へては。忠を盡し私を忘れ。我が身を顧ること勿れ。初學訓

○父母に對しては。色を和げ氣を下し。溫和を主として事ふべし。家道訓

○父母長上教誡をるあらば。首を垂れて之を聽くべし。妄りに自ら議論を爲すべからず。朱子

第二章　交際

○人に交るには厚きを旨とせよ。厚からざる人を責めずして。我を責むるなり。大和俗訓

○己を責むれば身修まる。人を責めざれば恨みなし。同上

○人城犯らさるることを易く。人乃我を犯せざるおそれ難し。同上

○人此心を知りて後交る勿し。知らざるを友とすれば後悔あり。大和俗訓

○西諺ふ曰く。交る友を見て其人品を識れ。

○高尚なる品行の人と共ふ居れば。其身を高處ふ引き上げらるゝを覺ゆ。品行論

○善人城見て之ふ效ひ。不善人を見て之を改む。善と不善と。皆吾が師なり。傳家寶

○西諺ふ曰く。惡人より愛せらる

れた。惡はるゝよりも危し。

○誇ることを休よ。我能く人に勝ふ。我に勝る者もまた多し。傳家寶

○他人の長短を論ぜんと欲せざ。先づ自己が長短如何を顧よ。願體集

○人を害する心を有るべからず。人を防くの心も無ればかならず。

同上

○陸宣公曰く。寧ろ人の我に負くとも。我も人に負くこと勿れ。

○貧極りて儉約せざる人は。親も交ふ事なし。願體集

○富てい貧き者を忘れ。貴くして賤き者を侮らず。初學訓

○富む時親まず。貧き時疎ぜざるを。真乃大丈夫なり。富を時進を。貧を時退くハ。真に小人なり。願體集

○程子曰く。富貴ハして人ハ驕る。固より善からず。學問して人ハ驕る。害も亦細ならず。

○不肖を以て人を待つ。愚者を雖

を甘ぜず。非禮を以て人を處す。賤者と雖も亦怨む。習是編

○西諺ハ曰く。無益の爭論を勝て益なく。負るハ益あり。

○スコルース曰く。自其身を恭敬をぱる者を。他人より恭敬を受くることを能をず。

○人と約せざ。信を失ふまじと勿れ。一度信を失なゞ。人ゐ非ぞと思ふべし。大和俗訓

○若し其事。義ゐ協はず。或ハ力及ばざんハ。始より約を結ふ勿れ。同上

○省心錄ゐ曰く。和けゞ仇なく。恐

欠

六頁

○人を誹ふハ不仁なり。且吾ヨ於て益なし。人モ之を聞ラば。甚ダ害あり。同上

○人ハ我譏ルベ。人又吾を譏る。人を誹ふハ。即ち自ら誹るなり。同上

○君子ハ。人乃善を揚げて人の惡を隱くし。人ハ長ずる所を取り。短

き所ばかり言ばば。同上

○口を開きて人を誚るは。第一の輕薄なり。唯德を失ふのみならば。亦我が身を失ふ。傳家寶

○只己れの是を說く者は。其心粗ぶ〳〵。其氣浮ぶ故なり。同上

○鄕里人物の長短を論じ。鄙俚無益の談を爲すこと勿れ。五種遺規

○佐藤一齋曰く。凡そ人を語るは。彼をして其所長を說らしむべし。我れ於て益なり。

○前人の長短を說くなと勿れ。自家の背後の眼あり。小兒語

○孔子曰く。人の惡を稱する者は

惡ミ。下流ニ居テ上ヲ訕ル者ヲ惡ム。

○子貢曰ク。是ノ邑ニ居テ長。其大夫ニ非ラズ。

○荀子曰ク。人ヲ傷ルノ言ハ矛戟ヨリモ甚シ。況ヤ紙筆ニ形ヲヤ。

○人ノ過ニ諫むるヲ誠あまり有テ。辭足らざるを善とし。大和俗訓

○世ニ虛言多シ。虛言ニ信トク人ヨ語ヒバ。吾モ亦虛言の責を免れざ。同上

○喜ぶ時ニ言ヲ多ク信を失ひ。怒る時の言ヲ多ク體ニ失ふ。傳家寶

第四章　學問　立志

○禮記に曰く。玉琢らざれば器を成さず。人學ばざれば道を知らず。

○孔子曰く。朝に道を聞けば夕に死すとも可なり。

○光武曰く。志ある者は事竟に成る。

○傳家寶に曰く。男子志なくして。鈍鐵の鋼なきが如し。

○佐藤一齋曰く。志を立てるの功は。恥を知るを以て要とす。

○荀子曰く。其人となりや。暇の日多けれども。人にまさること遠からじ。

○顔之推曰く。光陰を惜む事。諸

きを逝水に譬ふ。

○西諺に曰く。今日は後に今日に及し。又曰く。今日は一時は。明日の二時よりも貴し。

○程伊川曰く。學ぶ者は必ず師を求む。師は求めるこを。慎まざるべからず。

○道を教ふる此師を。其恩尤重し。君父と同じく貴ぶ可し。初學訓

○技藝の師を。亦我に恩あり。敬重きざるべからず。同上

○良田萬頃も。一藝の身に在るに如かざる。顔體集

第五章　儉約　安分

○管子曰く。人情
をして侈ならバ貧し。
力めて儉あれば
富む。
○倍根曰く。節儉
の要道は。小利よ
意を注んよりハ。

讀書百遍義自見

寧ろ小費を省くハ如かじ。
○スマイルス曰く。節儉は。家事を治
むるの精神なり。
○戎孫曰く。儉約は。安靜の基礎な
るのみならず。又仁惠の根源なり。
○分ハ過ぎて。福を求ゆるなば。却て
禍殘招き遂し。傳家寶

○分ヲ安ド。禍ヨ遠ざゥ生バ。自ら福を得べし。同上

○足ることを知る者モ。身貧しキ者だとも心富む。得ずして貪る者も。身富めども心貧し。同上

○禮記ヲ曰く。志ヒ満ヲうらず。樂ヒも極むべからず。

第六章　生業

○朝早く起くるは。家の榮ゆる兆なり。晩く起くるは。家ヒ衰ふる基なり。大和俗訓

○リッドン曰く。金錢ハ人の品行ヲ関モ。金錢乃事モ。決して輕率ヨ為ることと勿ル。

○冨爾拉曰く。正經の職業を有つ人は。卑賤を愧づることなかるべし。有たざる人は恥ぢべけれ。

○西語に曰く。金を借りに往く者は。憂を取りに往く者なり。

○西諺に曰く。利子を取んよりは。利子を出すこと勿れ。

○古語に曰く。勤めは貧きに勝ち。慎ミは禍に勝つ。

○西諺に曰く。狡猾にて財を得るは。名望を失ふ。

○又曰く。愚者は妄りに財を貯へ。智者は適宜に財を用ゐる。

○古語に曰く。廉士は財を愛をざ

るは非ず。之を取ること道に由る。

○一日の飯銭喫せず。一日乃飯銭を得るとも計るべし。必ず虚しく費すこと勿れ。願體集

○佐藤一齋曰く。信を人に取るは財の足らざるこを患なし。

第七章　改過

○孔子曰く。過てハ改むるに憚ること勿れ。

○又曰く。過て改めざる。是を過と謂ふ。

○左傳に曰く。人誰か過なからん。過て能く改れば。善こより大なるこ無し。

○西諺ニ曰ク。歡樂モ少キ時ヨリ己ノ過ヲ知ル者アリ。

○韓退之曰ク。人其過ヲ知ラザルヲ患フ。既ニ之ヲ知ルモ改むること能ハザル是勇ナキ也。

○西諺ニ曰ク。少ク時の過失モ老テ後ハ悔トナル。

○陸浮亭曰ク。過ヲ改むる乃人ノ天氣の新ニ晴ルガ如シ。我自ラ快シ。人之ヲ見るも亦喜ぶべシ。

第八章　躬行

○凡そ一念惡を思ひ。一事惡を行へば。天道ニ背ク。恐るべシ。初學訓

○善を爲すことも易く。善ヲ行ひ。

其名を求めざるべからず難し。是誠に善
なる。大和俗訓

○信とは心に誠あるなり。心はこと
ばれば言行の上にあらはる。五常訓

○人の心信實なるは萬事の基なり
。人に交るに道あり。同上

○若し信なければ萬事都て偽り

なり。人に交りて何如ぞ善らざるべ
き。同上

○薛文清曰く。人を感じ志むる能はざるは皆誠の未だ至らざる也。

○善を小ふして益なしと謂ふ勿れ。かなぞ。不善い小ふして傷をなしと謂ふ勿れ。賈誼新書

○西諺ふ曰く。一身は品行を。其危難を防くこと。一隊の兵馬よりも勝をり。

○スマイルス曰く。人の此世ふ在る。真正の權勢と稱をべき者を。品行ふり。

○薛文清曰を。日用の間。纖毫の事も皆當さふ謹慎をべし。

○鹵莽ふして煩戔厭ふ者を。決して成る乃理ふし。呂氏童蒙訓

○費元祿曰く。能く煩ふ耐へバ天

下何事ゝ為そべゝらざらん。

○西語ゝ曰く。出るとたゝ為べき丈とを思ひ。歸るやきた為たること

やを思へ。

○人驕きゝ志昏し。志昏きゝ計短し。傳家寶

○名を成をゝ。毎ゝ窮苦の日ゝ在り。事を敗るゝ。多く得意ゝ時ゝ因る。同上

○錢あらば。常ゝ錢ゝきの日を想へ。安樂なゝで。常ゝ病患ゝ時を思へ。同上

○西諺ゝ曰く。悦樂ゝ。勉強ゝ因て得る所乃賞典なり。

○セシル曰く。多くの事を為せば捷徑ハ他なし。即時に一事を為せなり。

○西語に曰く。真正の事業を工夫成用るるは勇みるに非ずんば。得べからず。

○古語に曰く。莫大は禍を。須臾の忍びばるに起る。

○孔子曰く。人遠き慮りなければ。必ず近き憂あり。

○一言は過も。莫大の禍となり。一事の失を終身の憂とるる。慎まざるべからず。大和俗訓

○西諺に曰く。一年善ならばまた。

七年の憂を招く。

○魏環溪曰く。世間第一敬まべれの人も。忠臣孝子なり。世間第一憐むべきの人ハ寡婦孤児なり。

○人乃聞ことなき事を欲せず。言ふこと勿れ。人の知ることなれことを欲をハ。為すこと勿れ。願體集

○陸浮亭曰く。天下何事か怒りふ因て錯らざらん。怒れず忙し。忙しければ錯る

○程漢舒曰く。人乃錯まる處を見てハ。時々我身を返り觀るべし。

○君子ハ人を勸めて。訟を息めむ。小人ハ人を激して。訟を起さしめ。

む。顧體集

○身を終るまで路を讓るべども。百歩ゝ枉げば。身を終るまゞ畔戈讓れども。一段を失ぬ。同上

修身兒訓巻之二　終

准寫
東京光風社
明治十四年之冬以後製本以此紙為証

明治十三年十一月廿五日版權免許
同　年十二月廿一日出版
亀谷省軒閲
修身児訓字引
右六類本ヲ亀谷校閲ノ以テ真本トス
東京府士族
光風社長
編輯并出版人　亀谷行
東京御徒町一丁目六十七番
發兌
柳原喜兵衛
大阪北久太郎町
書川半七
東京南傳馬町
石川治兵衛
同　馬喰町一丁目

龜谷行編

脩身兒訓

三

第ノ十三号

0843
1
丸3